みんつど

第二十四号
編集　天地　成行

Kさん「哀戦士たち」

提供

村岡鍼灸治療院
阿東つばめ農園　俳句雑誌「山彦」レストハウスたんぽぽ
こころてれび　ひだまりの会　株式会社くるとん

そりゃあホルマリンも抜けますわ

みなさん、こんにちは。こんばんは。おはようございます。みんつどのお時間がやってきました。

「なんのこっちゃ？」のタイトル。実は前号からまだ断捨離をしています。机の下の資料やファイル整理、押し入れにいろいろあるものを整理しました。すると小瓶が出てきました。二十年前に手術した左脚大伏在静脈クンが入っておりました！でもホルマリンさんがなくなって、しわっしわになりましたねえ。この紙面にはふさわしくないのでご想像ください。

さて発作的に制作するビョーキ感満載の編集長・天地でありますが、今年は早くも今号で最終号。また来年まで冬眠します。秋眠？　ですかね（笑）。昨年九号。今年は十五号発行です。

今号のラインアップは、二面に入院前の奇行珍エピソード。三面に俳句の師匠・河村正浩先生の寄稿。四面は原井育子さんスペシャルコラムなどで構成します。

ご意見や感想をメールで待ってます。前号は大変多くの励ましや入院珍エピソードで笑い、三面の一人座談会で当事者さんから「わかる～」をいただきました。原井さんのオリパラの感想に感激を思い出した人も……。私もです。『わたしは山頭火！？』の感想もありがたくいただき、それを読んだ方からもさらにいただきました。全体を通したレイアウトや見出しでのセンスをも褒めていただきました。これを持って、若い方とお話もさせていただきました。いろいろあった半月でした。メアドは、「docomo.komo.2019@gmail.com」です。どうぞよろしくお願いします。広くお待ちしております。

そして、最後に四面にて爆弾企画がついに発動するかもというようなことが書いてありますよ～、次号以降に期待が持てそう。

では、十月発行の十二月号、スタートします。

まだあった！　天地成行のユニーク小噺2014

珍エピソード

前回の入院エピソードが好評につき、また思い出したエピソードを披露します

地球防衛の極秘任務？

入院前の夏の夜の出来事。真夜中に飛び起きた。極秘任務が舞い込んだのだ。今晩の任務は寝ずに地球を守ることだ。その方法は、地球を愛していると休みなく思い続けることであった。布団の中で思っているだけではだめだ。あたりは梅雨のおわりの大雨だが、任務なのでサンダル履きで誰にも気付かれないように家を出る。頭の中で、地球に向かって「愛してる、愛してる」とつぶやきながら歩いた。私が地球を愛していると考え続けないと、地球が爆発してしまうシステムのスイッチがオンになってしまったのだ。「アイシテル、アイシテル」どんなに地球を愛していてもタバコは吸いたい。コンビニに入り、眠そうな店員に告げる。「ハイライトを一つ」「棚の何番なんでしょうか？」こちらのミッションも知らないでのんきな返事だ。フランチャイズの本部に秘密がばれない範囲でぎりぎりのメッセージを店員に送る。「アナタの愛で探しなさい」暗号に気づいたのか、店員は急に眠気からさめる。彼は、心中の動揺を抑えて急いでハイライトを見つけ、しいて平静をよそおいながら「〇〇円です」とわざと事務的に言う。「あーいしてーる、あーいしてーる」頭の中の秘密指令の暗号は、メロディーの形をとって送られてくる。にしきのあきらドリカムを経て、いまは米米ＣＬＵＢになっている。国道をサンダルで傘をさして歩く。真夜中になっても日中の暑さを含んだアスファルトが生あたたかい。両足から這い登ってくるぬくもりは、地球のエネルギーのみなもと・マグマの熱に違いない。レンタルビデオ屋の前で、いよいよサンダルを脱ぎすてる。いつのまにかサンダルに探知機が取り付けられていて、地球破壊軍の司令部にこちらの動静が筒抜けになっていたのだ。コンビニを出たときは傘をさしていたのだが、いつのまにか頭から足までずぶぬれになっていた。傘こそはその形状から探知機が付けやすいものなのだが、そのことに気づいて、早めに傘を投げ捨てたのだったが、あるいは気づいていないふりをするために傘をもっていたのか、それは思い出せない。とにかく傘も意味をなさないほどの大雨の中で港へ向かい、夜更け前に港に着く。メドレーとなった暗号メロディの「愛してる。アイシテル。あーいしてーる」に「最後に愛は勝つ！」とＫＡＮの歌をミックスしながら、地球を破壊から守り続けた。埠頭に着いて体育座りになり大雨の中、Ｔシャツを脱いだ。数時間ののち、あかるくなった港を偵察に来た「地域防衛軍」が警官の服装で私を「保護」した。敵の司令部が私のパンツにまでは探知機をつけきれなかったのは幸いだった。警察署まで迎えに来た母に、この日「地球の破滅」を救ったのが私であることを明かそうかと思ったが、極秘任務なのでやめておいた。だから私は母に、「腹が減った。今朝のごはんは何？」と笑って聞いた。母は「昨日のハンバーグが残ってるわよ」と笑顔で返した。入院まであと三日。

「山彦」主宰 河村正浩氏から特別寄稿

「平成の山頭火」

平成二十六年十月十一日、山口市小郡の其中庵（昭和七年～十三年迄山頭火が居住。現在の建物は復元）で、山頭火ふるさと会（窪田耕二会長）による山頭火の七十五回忌の法要が行われた。まだ時間があることから、この其中庵のすぐ上にある休憩所で時間をつぶしていた。そこへ母子と思われる二人連れ。挨拶程度の簡単な言葉を交わす。観光客だろうと思った。

法要が始まった。法要といっても十名足らず。その中に先ほどの二人の姿もあった。それが天地君とお母さんだった。法要は、会長さんの挨拶に続いて、参加者全員で句碑にお酒をかけるのである。そして直会と称し飲み食いをするのだが、この日はどうだったのか記憶が定かでない。はっきり記憶に残っているのは、天地君が、

「句を作っているので見てください」

ノートだったか色紙大の紙を綴じたものかは忘れたが、窪田会長へ差し出した。窪田さんがめくる。その横で私が相づちを打つように、

「これは立派な自由律だ」

「うん、これは違うな」

と言いながら、こいつは若いし、鍛えたらものになるぞと、内心ほくそ笑んでいたのである。その日は住所を交換しただけで別れた。

それから二ヶ月に一回の頻度で二十句が送られてくるようになった。二十句、今だから言えるが実にしんどかった。添削するにしてもその理由から詳しく説明しなければならない。また、家に籠もって机上であれこれ考えないで、外へ出て風景を詠むようにしようと繰り返し言った。実は添削当初、彼が病気とは知らなかったのである。文通を続ける内に分かってきたが、詳しいことは分からず、相変わらず、家に籠もらないで外へ出ろと言ったものである。

私の俳句は定型俳句であるが、自由律や川柳知らずして定型俳句は語れないとして、自由律を学んできた。彼に定型俳句を一、二度試みたが見事にふられた。

定型俳句は五七五の十七音で季語を入れるという制約があり、「や」「かな」「けり」といった切れ字が使用できる。定型俳句の基本は写生で、今の今、見たその瞬間を切り取る。自由律の場合は、自由律なりにリズムは必要だが四文字から二十七、二十八文字で詠まれている。長いものになると主観的な句や人生訓的な句が多いようである。

『わたしは山頭火！？』の中に「ものすごく思考が固まっているような、かといって思考がまとまらないようなことが多かった病気を持つ者には…まったく理解できなかったことが多かった。」とあるが、今になって思えば、その繰り返しが良かったのではないかと思っている。

救急車に乗って早くおうちへ帰りたい

この句について、「自由律ではないね」と言ったそうだが、記憶にない。今見れば、立派な自由律ではないか。それは『わたしは山頭火！？』を読み『みんつど』を読んでいるからかもしれない。

私が指導を始めて三年くらい経ったであろうか、やはり自由律の先生に見てもらう方が良いと思い立ち、防府市の自由律誌『群妙』代表の富永鳩山先生を紹介した。それからめきめき腕を上げたのは事実である。その成果として、三名の合同句集として『ベクトルのはじまり自由律三人句集』を刊行した。

匂い温もり全てがあなたの季節です　母よ

家がある日向ぼこする　ありがたい

いさかいし父と和解の缶コーヒー

五〇キロの母に百キロの巨体で甘える

母のマッサージ　全身がツボ

ふかふかの蒲団お母さんの中みたい

母の枕嗅ぐ

集中、母の句十句に対し父の句は三句であった。だからと言って天地君が乳離れ出来ないというのではない。一般に「母」は乳臭いノスタルジアを内蔵するのに対し、「父」は反発するにしても、共感するにしても、父の人生に自分の人生を重ね、その無言の背中から、孤独で厳しい悲愴感さえ伴った生きざまを掴みとる。とすると、母は潤滑油のようなものかも知れないし、それだけに詠みやすいものである。

ホットカーペットであじの開きとなるわたし

「で」がなければ定型のジャンルである。「あじの開き」という擬人化が面白い。

さあ飲もう人生は長いぞ

ほろ酔うて　一人

彼と飲むことになった。『わたしは山頭火！？』の出版祝いである。私の行きつけの小料理屋である。普通ならカウンターだが、彼のことを考慮し一つしかない部屋を使わせてもらう。吃驚した。良く食べる。その上うわばみである。そして、全く崩れないのである。それにしても良く飲んだ。決して安くない店である。午後六時から八時までの二時間である。それから半年後にまた飲んだ。同じ店である。電話で、

「今度は飯食って来るんだぞ」

「分かりました。そうします」

結局飯は食って来なかった。割り勘にした。

これ以外にも佳句は沢山ある。将来、是非とも句集をと願っている。

自分の歩幅が見えてきた四〇歳

『わたしは山頭火！？』の出版以来、忙しい毎日を送っている。人との交流が増え、輪ができる。その輪が大きくなる。マスコミへの登場、講演と益々忙しくなるであろう。自分自身の事、それが軸足であるからぶれることはあるまい。そして、日々の記録として、月に何句かの自由律を残して欲しい。最近は小説（創作）にも興味があるようだが、令和の今、平成の山頭火はどのように脱皮するだろうか。取り敢えず「前向きの山頭火」と呼ぼうか。

最後に、私と会うときの彼は常に健常者である。

次号からコラムは藤井秀樹さんに

次号からのコラムコーナーは藤井秀樹さんにお願いしました。自己紹介をしていただきます。

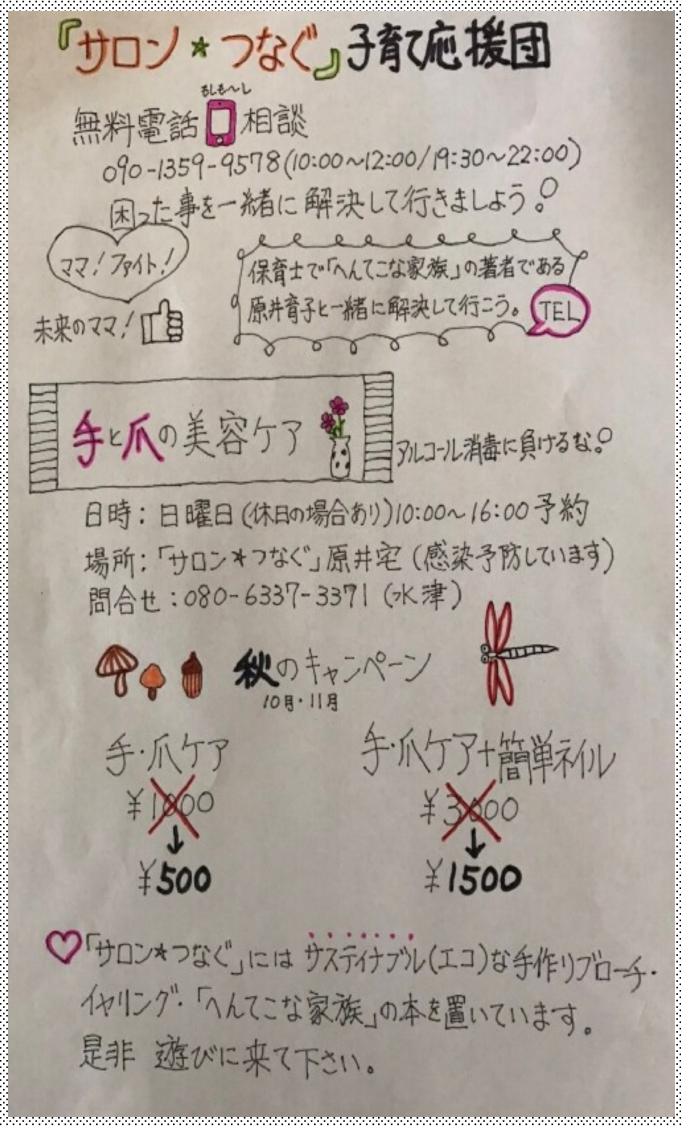
◇

初めまして。次回からコラムを受け継ぐ藤井秀樹と申します。

私は、山口県の高校を卒業後に、一年浪人して鳥取大学に入学し、一年留年して卒業。その後、建設会社に入社し、現場監督の仕事をしました。しかし、入社４年目の時に、統合失調症になり会社を退職。そして、親の仕事を手伝っていましたが、更に体調を崩して、精神科病院に入院してしまいました。病院で、いろいろな人と知り合い、悩みを聞いている内に、彼ら彼女らの役に立てる仕事をしたいと思うようになり、退院後に専門学校に入り、国家資格の社会福祉士を取得、生活指導員として働きましたが、また体調を崩し、以後入退院を繰り返しました。

現在は、配管工の仕事をしており、７年目。最近は生活に自信が持てるようになり、ピアカウンセリングをして、いろいろな人の問題を解決していこうと考えています。よろしくお願いします。

原井育子さんコーナー最終回



原井さんのサロンに興味のある方はご連絡を（天地より）

我が家のアイドルだったナナちゃん「良くやった」

今年も皆さま、大変ありがとうございました

さて、今年もこれで最終です。三十人を軽く超える方に執筆、コメントいただき、十五号を発行した今年は飛躍でした。最後に河村正浩先生にも寄稿いただきました。ありがとうございました。先生の前では平静を保たねばとの思いで、お会いしている時も、健常者に見えたのかもしれませんね。個室にいてもカウンター席の声にびびりながら酒をくらっていた私を先生は見逃さなかったですよね。温かい方です。

今年の発行方針として当初、年に数回にして、ページを増やし、テーマを設け云々と書いていました。見事に外れました（笑）。

来年は、気を抜いて楽に作りたいという思いで今はいます。他のミニコミ誌で「ワンコインサポート」という制度を設けていて、採用したいなあ、でも住所など公表していないしなあとか考えたりします。単純に切手も欲しいとか思ったりしますが……。「えーい、天地よ。くれくれ言うな！見てやらないぞ、感想も送らないぞ」なんて言わないでくださいね。まあ、気楽に作ります。ハイ。またいろいろサポートしてくださっている方全てに感謝します。ありがとうございます。今後もよろしくお願いします。

この後記の最後になりますが、私が何かを続けていっているというスバラシイ証と、さらなる読者のため、またこれまでも読んでいただいている方のためにも、２０２０～２０２１年の『みんつど』全紙面を冊子化していこうというマル秘計画が私の中に渦巻いています。実現できているかは、あなたのお手元に届いているかで決まるかも？しれませんナンチャッテ。これもナニブンお金がかかるもんではっきりしたことは言えません。では、来年までお元気で！